下部消化管内視鏡検査前に転倒し骨折した症例を経験して
～転倒予防に向けた対応策～

嬉野医療センター
内視鏡室　齊藤　直美、古川芙美子
医　　師　山口　太輔

【背景】

当院の内視鏡室では年間約5000例の検査を行い、そのうち下部消化管検査は外来・入院合わせて１日10例ほど行っている。

腸管洗浄液服用の偶発症として嘔気や気分不良が問題となるが、今回、パーキンソン患者の転倒、骨折を経験した。転倒した患者は、内視鏡室の前処置室にて腸管洗浄液を服用し、前処置が終了。検査直前、点滴を確保後に便意を訴え、トイレ歩行時に転倒し受傷。上腕骨骨折と診断され整形外科へ入院、内視鏡検査は延期となった。

Ｐ-mSHELL法を使用し、分析結果から転倒予防策を立て実施した結果、一定の効果を得たので報告する。

【方法】

期間：2020年4月～ 2022年12月

対策：

- スタッフの意識を高めるため患者の履物や歩行状態を注視するようポスターを掲示。
- 下剤内服患者への検査説明時、検査を受ける患者への検査時の上履きの提供はないため履きやすい安全な履物で来てもらうよう事前説明を追加する。
- 検査予定患者の情報収集、患者の履物・歩行状態のアセスメントを確実に行う。
- 当日検査の患者で歩行状態不安定、何らかの介助が必要な患者の情報を当日の内視鏡スタッフ間で共有し必要な介助ができるように努めた。

【結果】

2020年4月以降、下部消化管内視鏡検査を受けた患者4442名で転倒事例は認めなかった。

【考察】

P-mSHELL分析の結果、Pでは、患者は靴底がはがれる靴を紐で固定し履いていた。転倒時その固定紐が外れていたためつまずいた可能性も考えられた。患者の前処置に重点を置いてしまい転倒につながる履物に気づけなかった。そのため検査説明時、履物についての注意点を追加した。S、Hでは、患者は普段から杖を使用していた。転倒時は、裾の長い検査着を着用し点滴を確保した状態だった。対応策として更衣、点滴確保前に必ずトイレを促す、点滴確保後のトイレの案内はスタッフが付き添うこととした。E、Lでは、検査の前処置が患者のADLに及ぼす影響を適切にアセスメントできていなかった。患者の履物や歩行状態を注視するようポスターを掲示、介助が必要な患者の情報を共有するように努めた。それによりスタッフの転倒防止への意識が高まり、患者への注意喚起も増え、患者の意識付けにも効果があったと考える。また、検査の前処置が患者に与える影響、ADLを適切にアセスメントし対応することも重要である。

上記の転倒予防策を行った結果、転倒する患者は認めていないため一定の効果はあると考える。

【結論】

今回の転倒予防の対応策は、患者に対するアセスメントの重要性を再認識しそれをスタッフ間で共有したことで転倒予防に繋がった。